

イルカ介在療法のこれまでとこれから

- 門多 真弥 (本学大学院 博士後期課程)
森阪 匡通 (東海大学 創造科学技術研究機構 特任講師)
小木 万布 (御蔵島観光協会)
古田 圭介 (神戸市立須磨海浜水族園 海獣飼育課)
亀崎 直樹 (神戸市立須磨海浜水族園 研究教育部長 岡山理科大学 生物地球学部教授)
大矢 大 (本学教授)

人と動物の関係

動物は、人の生活のいたるところに存在している。歴史的にもその関係は非常に深く、紀元前一万年前の旧石器時代に描かれたというスペイン、アルタミラ洞窟の野牛、馬、トナカイなどの壁画などからうかがい知れる。人にとって動物は食べ物としての存在や生活を脅かす存在であったが、歴史が進むにつれ、より多くの関わりをもつようになる。信仰としての対象、愛玩としての対象、家畜としての対象、生活を補助する道具としての対象などである。

人と動物の関係が広がるなかで、動物が人の健康に役立つのではないかと考えられるようになる。それは古代ローマ時代にまでさかのぼり、傷ついた兵士のリハビリに乘馬が用いられていたという記録がある。紀元前100年には、今で言う盲導犬のような役割を担っていたとされるイヌがいたという文献もある。中世を経て近世になると、18世紀の英国の精神病患者の収容施設であるYork Retreatでは、初めて、患者にウサギやニワトリなどの動物の飼育をさせ一種の楽しみを与えると同時に、自制心を身につけさせたという記録が残されている。当時、精神病患者には問題行動の罰を与え、制限をかけることが「治療」とされていた。そのため、この動物を用いたアプローチは患者の人権を尊重した新しい手法とされた。続いて、19世紀にはドイツのてんかん患者のための滞在型の治療施設で、

生活の中にイヌ、ネコ、ウマなどの動物の飼育や交流を取り入れる試みを行っている。20世紀半ば、アメリカの陸軍航空隊では、第二次世界大戦の負傷兵のための療養センターを設立し、負傷兵の気分転換や好奇心を刺激することを目的として、動物と接することを実践していた。センターでは、その農場でウシ・ウマ・ブタなどの家畜を扱う作業をしたり、センター近くの森で動物たちと自由に触れ合える環境を通して、負傷兵の心身の回復を図っていた。このように、古代から近代にいたるまで、動物を介在して人の健康に役立てる試みは続けられてきたのだが、その有用性は語り継がれるだけだった。

アニマルセラピーの研究のはじまり

いわゆる「アニマルセラピー」の報告を最初に行ったのは、アメリカの臨床心理学者のLevinson (1962) である。彼は、長期の引きこもりだった無口な8歳の少年が、偶然Levinsonの飼い犬であるJinglesと出会った際、急にJinglesに積極的に語りかけ始めたことを報告した。Jinglesが治療の場にいることで、最終的に少年に好ましい変化が見られたことを、彼は“The dog as a ‘co-therapist’”という論文で発表した。この経験を通して、彼は心理臨床の中で動物の介在することの検証を始めた。

このLevinsonの気づきは、現在のアニマルセラピー研究の出発として、多くの臨床家を刺

激した。Levinsonの論文が発表された1960年代から1980年代にかけて、動物を介在させた治療の報告が次々となされた。Corsonら(1977)は、病院の精神科で入院患者にイヌを用いたアプローチを実施し、50名中47名の患者たちの社会性が改善したことを認めている。さらに、Corson & Corson(1978)は、老人ホームにおいて動物を用いたアプローチを試み、施設利用者の自信の回復と、施設利用者同士、および施設利用者と施設スタッフとの相互のやりとりを促進するという効果が認められたことを報告した。Levinsonはこの間、動物が介在すると安心感を持って人が発達すると論じたり(1978)、観賞魚が子どもの心理的療法において不安の軽減などに役立つことを指摘したりする(1979)など、臨床研究を続けていた。これらの臨床場面での研究や実践を追うように、病院や滞在型治療施設、老人ホーム、刑務所、学校など多様な施設で、アニマルセラピーの取り組みがなされている。

AAT(Animal Assisted Therapy)・AAA(Animal Assisted Activity)

アメリカでは、Levinson(1962)の報告に端を発するアニマルセラピーの研究が次第に進む中で、「人と動物の相互作用に関する実践、普及、研究活動を支援する」という目的のもと、その研究を支える組織、デルタ協会(Delta Society)が1977年に設立された。獣医師、精神科医、獣医科大学関係者らによって構成され、人と動物が共に生活しふれあうことで生まれてくる相互作用を「人と動物の絆: Human-Animal-Bond: 以下HAB」と名づけ、機関誌「Anthrozoös」を発行するなど、さまざまな研究の支援活動を行っている。この協会は、2012年に「組織の課題をより明確に示すため」に、団体名を「Pet Partners」と変え、更なる活動を続けている。

デルタ協会(Pet Partners)は、アニマルセラピー、動物を介在させるアプローチを、動物介在療法(AAT: Animal Assisted Therapy)と、動物介在活動(AAA: Animal Assisted

Activity)の2つに分類している。動物介在療法(AAT)とは、人と人との治療的な関わりに動物を介在させる手法であり、治療目標を設定したプロセスである。一方、動物介在活動(AAA)は、人と動物の絆を利用して、対象となる人の生活の質(Quality of Life: QOL)の向上を目的とし、動物とのふれあいなどを中心とした活動をいう。このAAT・AAAを通して、動物が人の心身に与える効果は、「心理的効果」「身体的効果」「社会的効果」の3つがあると言われている。心理的効果とは、自己認識や情緒面の改善のことを示し、人が動物とのかかわりの中で、自信や自尊心を高めたり、自己効力感を向上させるほか、不安やストレスの軽減にも役立つと言われている。身体的効果は、病気からの回復、血圧や心電図などの正常化、四肢の麻痺などの改善効果のことを示し、動物と接することによる身体の緊張軽減の効果が提示されている。社会的効果は、他者との会話の増加などの対人関係の改善効果のことを示し、例えば、対話場面に動物がいるとき、動物を介した話題が増えることで会話促進が期待できる(「社会的潤滑油」: 横山, 1996)。これは、心理臨床を円滑に実践できることに結びつく可能性も示唆されている。

デルタ協会(Pet Partners)以外に、1970年代から1980年代には、英国でSociety for Companion Animal Studies(SCAS)、オーストラリアでInstitute for Interdisciplinary Research on the Human-Pet Relationship(IEMT)など、世界各地でHABの研究およびそれに関する活動を援助する組織が設立された。これらを統合する形で、世界規模の学際的な組織として、ヒトと動物の関係国際学会(International Association of Human-Animal Interaction Organizations: IAHAIO)が1990年に設立された。このIAHAIOは発足当初から3年に一度、世界的な学術会議を開催している。

IAHAIOへの加盟は一国に一団体を原則としているが、日本では、社団法人日本動物病院福祉協会(Japan Animal Hospital Association: JAHA)、ヒトと動物の関係学会(Society for

the Study of Human-Animal Relations : HARs), 一般財団法人J-HANBS (Japan Human Animal Nature Bond Society) の3つが加盟している。JAHAは、獣医師を中心として1978年に設立され、「動物病院および動物医療の充実のための継続教育事業」や「動物病院による地域社会への貢献を推進する事業」などを公益目的事業に据え、人と動物のふれあいの場所・時間を提供するボランティア活動を行っている。この活動は「CAPP (Companion Animal Partnership Program)」と名づけられ、1986年5月からはじめられた。2014年3月までに訪問回数15,860回を記録し、延べ、獣医師23,967人、ボランティア123,802人、動物、犬92,172頭、猫20,281頭、その他6,826頭という多くの人・動物が参加し、高齢者施設、病院、学校などを訪問している。しかしながら、活動実績はあるものの、これらの活動はJAHA本部のある首都圏や近畿圏に限られており、全国規模での活動に至っていない。HARsは、獣医学関係者が中心となり、1995年に人と動物の関わりに関する研究を多面的に支えることを目的に設立され、学術大会や研究会、公開シンポジウムなどの開催、年数回の学術定期刊行物の発行などを行っている。HARsの設立課題は大きく二つあり、「動物と人の間の現実的課題をいかに解釈しその対策を講じるか」という目的指向的なものと、「動物そのものの特性や人間自身を知り、人の知識を豊かにしたい」という知的指向的なものがある。現在では、これらの課題に対して、動物行動学や心理学、医学や社会学など動物に関わる多岐にわたる領域からの参加者が集まっている。その中で、AAT・AAAの報告は設立当初から月例会でなされており、それ以降、現在に至るまで、シンポジウムや一般演題でもしばしば取り上げられている。例えば、高齢者介護施設でウサギやモルモットを用いたAAAが日常生活に変化の少ない高齢者への刺激となり、老化防止対策となるという報告(吉田ら、2003)などがある。J-HANBSは、わが国、そして米国や英国の獣医学者を中心として2000年に発足した。2014年にIAHAIOに承認されたこの団体は、旧デルタ協

会の定めたHABの概念に「自然 (Nature)」を加えた「人と動物と自然の絆 (HANB)」という概念を活動理念に掲げている。J-HANBSはHANBを「人と動物と自然が共に生活し触れ合うことで、その中に生まれてくる相互作用」と定義し、これが子どもたちの発達において必要不可欠であると述べ、子どもの教育にHANBを反映させるための取り組みを行っている。その一環として、HANB教育のインストラクターを養成する通信教育講座を開設するなど、AAT・AAAだけではなく、動物を介在した教育の分野への活動を行っている。

このように、AAT・AAAにかかわる組織や研究が増えていく中で、「アニマルセラピー」という言葉が周知されるようになる。現在、わが国では「アニマルセラピー」という言葉は、AAT・AAAを総称して用いられ、それなりに普及しているように見受けられる。しかし、わが国では、米国のデルタ協会のようなボランティアによる支援体制が整っていないこともあり、用語同様、実情としてもあいまいなものであるのが現状である。「動物と人がふれあうことで人の問題が治療できる」というメディアの偏った報道もあり、「アニマルセラピー」はそのイメージだけが一人歩きしているように見られる。人と人の関係の中に動物を介在させるという、本質とは異なる理解が、されている場合が多いようだ。今後、更に適切な研究を通して、これらのことが適切に理解され、その誤解を解消する必要がある。

AAT・AAAにおける動物たち

AAT・AAAの介在動物として、多くの動物が報告されている。ネコについては、大学の学祭で「ネコカフェ」の催しに訪れた人物に「やわらかかった」など、安心感をもたらせたという研究(今野・尾形、2008)がある。観賞魚をいれた水槽がストレス場面に設置されていると、ストレス気分が軽減される報告(門多ら、2011)などもあり、さまざまである。ここでは、イヌ、ウマ、イルカという3つの動物を代表として述べる。

1. イヌ

イヌは、われわれ人の生活に最もなじみのある動物の一つとしてあげられる。イヌは人の生活の中でさまざまな役割を果たしている。盲導犬、聴導犬、介助犬、警察犬など、その果たす役割は他の動物とは比べものにならない。Levinson (1962) がAAT・AAAのヒントを得た存在も、彼が飼っていた愛犬である。イヌは、個体数が多く、人が飼育し易く、指示を与えるためのトレーニングが可能であるということから、AAT・AAAの領域でも重視されてきた。欧米では、1970年代からドッグセラピーとして、心理臨床の場面でイヌを介在させることが始まり、精神科病院・老人介護施設・児童養護施設などさまざまな場所で、イヌを介在動物とする動きが広まった。性的虐待を受けた子どもに対するグループ心理療法にイヌを同席させると、子どもたちが虐待の内容について話しかける相手としてイヌを利用し、語りが促された例(Reichert, E., 1994) や、老人介護施設で利用者のイヌとのふれあいを通して、抑うつ状態や不安、怒りなどが減少したという報告(Struckus, J. E., 1989) もある。わが国では、JAHAのCAPPとして、高齢者施設や学校などにイヌを派遣し、ふれあいの時間を作り、人がイヌとのぬくもりを通して安心感を得る活動をしている。ほかに、2009年に発足した介護高齢者ドッグセラピー普及協会(通称:オレンジジャケット)は、米国のセラピードッグ訓練法に則り育成したイヌを介在させ、重度の認知症患者を対象にしたドッグセラピーを行っている。認知症の患者が、イヌとの身体的ふれあいや、散歩などの活動を通して、発語が増え、認知症の症状が緩和された報告もある。

2. ウマ

ウマは昔から、AAT・AAAの領域以外にも、人の健康保持に役立っていた。先に述べた、古代ローマ時代での兵士のリハビリなど、その取り組みは古くからある。17世紀には、痛風治療や結核改善、神経麻痺などのリハビリを兼ねた乗馬を推奨する動きが始まっている。20世紀に

入ると、ウマと人との関係を検討されるようになり、「乗馬療法」という言葉が生まれた。これは、ウマが単に介在動物として、ふれあいの対象として用いられるだけではなく、ウマが人に対して身体訓練の道具として活用できる、乗馬というスポーツとしての側面を持ち合わせていることに起因する。これは、心身どちらもの機能も向上させることになり、乗馬療法には大きな注目が注がれている(Bertori, 1991)。乗馬療法は、人の身体面や社会性に働きかけるとも言われている(岩本・福井, 2001)。わが国では、身体障害者厚生施設で、身体障害を抱えた男性2人を乗馬させ、身体機能の向上を図るとともに、「乗馬をすすめると馬がかわいくなってくる」などのAAA的側面の感想が得られた研究(近藤・安井, 2011)がある。ウマなどの大型動物を介在したAAT・AAAでは、ダイナミックな活動を可能にすると考えられる。

3. イルカ

近年、特に注目を集めている介在動物はイルカである。イルカを介在動物とする歴史はまだ浅く、1970年代にアメリカの心理学者Smithが発達障害児にイルカとのふれあいの場を設けたことに端を発する。彼女はこのイルカを介在動物とした活動を施行し、「訓練を受けたイルカと自閉症児や発達障害児との間に、なんらかの治療的効果を引き出すことができる」という仮説を立て、検討するプロジェクトを「INREACH」と名づける。このプロジェクトは、自閉症児などを対象に、野外のイルカプールで一日4～6時間イルカとのふれあいの時間を設け、海での水遊びや、イルカとのキャッチボールなどがなされている。これに参加していた17歳の少年マイケルは、自閉症で言語障害をもち、ほとんど発声をする事がなかった。しかし、彼は声を上げてイルカの興味を引くということを身に付けることができた。この、声をあげることは日常でも見られるようになったという。Smithは、この効果を偶然ではなく意味があるものと考え、INREACHでの一連の流れを「Dolphin Assisted Therapy (略してDAT)」と名づけ、世界に新

しいジャンルとして一石を投じた。アメリカをはじめとする欧米では、自閉症やダウン症などを抱えた子どもの言語トレーニングでイルカを介在させることによって理学療法よりも高い目標達成率を見出した事例 (Nathanson, 1998) や、障害をもつ子どもとイルカとの交流を行う取り組みに加え、子どもの保護者に対するカウンセリングを加えることで、子どもと保護者の相互のやりとりの変化を検討した例 (Breitenbachら, 2009) などの報告が行われている。また、我が国では、獣医師・臨床心理士が集まり、「日本におけるイルカ介在療法、介在活動の調査研究および確立」という目的のもと、日本ドルフィンセラピー協会 (JDAT) が2002年に発足した。この組織は、香川・愛知・高知・山口の沿岸のイルカ飼育施設や水族館をフィールドとして、中央大学が中心となり、取り組みを行っている。また、JDATとフィールドを同じくして、山口大学や大阪教育大学でも、イルカを介在動物とした研究の発表が行われている。代表的な研究として、大阪教育大学が2009年に香川県さぬき市で短期集中型のAAAプログラムを実施している。このプログラムでは、自閉症と重度知的障害を持った13歳の少年が、3日間の間に4回のイルカとのセッションを通して、「イルカに触れる・撫でる」や「インストラクターとコミュニケーションをとる」などのセッションの中で設定されていた行動課題をこなせるようになったという (加田ら, 2009)。また、山口大学では、山口県内にある水族館で行った、自閉症児対象のイルカふれあい体験に参加した子ども20名とその保護者にアンケートを行っている。保護者からのアンケートでは、子どもたちが、イルカとのふれあいを通して、他者への感情に関心を持つ部分が伸びた、パニックがなくなった、などの情緒面での落ち着きや成長が見られたという報告を行っている (小畑ら, 2010)。

介在動物としてのイルカの課題

イルカを介在動物とした報告がなされるなか、その報告の姿勢に反対する立場がある。先に述べたSmith (1996) は、DAT研究をすすめるう

ちに水族園などで展示・飼育されているイルカたちの存在を否定する意見を打ち出した。彼女は、ショーなどで活躍するイルカの姿を「アミューズメントではなく、アビューズメント下にある」と評している。さらに、彼女はアビューズメント下にあるイルカたちとのふれあいは、いかなる観点からみても、それらは「セラピーと呼べるものではない」と主張し、研究の進展に問題を提起している。実際、彼女はこのような飼育下のイルカを用いたAAT・AAAの研究に限界を感じ、自然に住むイルカとの交流を重視した、イルカをコントロールしない野生という環境でのDATを提唱している。

しかしながら、この飼育下のイルカに対する批判は、Smithが自身の経験のみで述べたものであり、何らかの形で実証はない。辻井 (2003) は「野生イルカが飼育されたイルカより、どのような点で効果があるのか根拠はまだ明らかにされていない。そのため、さらなる研究が必要である」と指摘する。我が国のイルカ事情を考えてみると、国内で野生イルカに出会うことのできる場所は非常に少なく、セラピーを行う環境を探すことは非常に難しい。AAT・AAAを行うには、Smithは限界を感じたのだが、人のコントロール下に置かれているイルカが欠かせない。Levinson (1969) は「いかなる動物も癒しの効果を持つ」と述べている。生息環境がどうであれ、飼育下のイルカが介在動物となる可能性は否定できず、むしろ適切であると考えられよう。

介在動物としてのイルカの考察—野生イルカと飼育されたイルカ—

実際に、野生イルカと飼育下のイルカ、それぞれと関わり持ったとき、どのようなちがいが生じるのだろうか。筆者らの体験を報告する。

1. 野生イルカ

筆者は、野生イルカと会うために、伊豆諸島にある御蔵島 (東京都御蔵島村) へと、2013年および2014年の二回訪れた。御蔵島は、東京都心から太平洋沖に約200km離れた、総面積

20.58km²の小さな離島である。島には東京都港区にある竹芝桟橋からフェリーで8時間ほどかけて移動する。島の周辺には野生の120頭ほどのミナミハンドウイルカが季節を問わず生息している。このような生息地は世界的にも稀で、多くの研究者がこの島に足を運んでいる。ここでは、イルカ・人の双方の安全のために、決してイルカに触れないことを条件とし、シュノーケリングの形でイルカをみることができる。陸上でウェットスーツやシュノーケリングの準備をして、イルカウォッチング船で島から沖に出て、イルカのいる場所を探索しながら移動し、ガイドの指示に従い、海中でイルカの様子を見学する。一連の準備と動作のため、1回のウォッチングに2時間ほどがかかり、それに要する体力が求められる。

一年目の体験では、全てが初めて故に、非常に戸惑い、苦勞した。まず、海に体がなれるように訓練をしなくてはならない。また、船で移動するので、船酔いの対策を講じなくてはならない。海の中に入ると言う体験そのものが筆者にとっては久々のことで、海に全身が浮く感覚になじめず、じっくりとイルカを観察する心身の余裕がないまま、あっという間に時間が過ぎてしまった。そのため、とても物足りなさを感じた。その上、初めてイルカが眼前を泳ぎ去ったとき、その大きさ、スピード、大きな口から覗く歯に、一瞬の恐怖を抱いた。しかしながら、その恐怖はすぐに消え去り、水中でイルカと目を合わせると言う体験に、言葉ではあらわせない強い感動を覚えた。このとき、十数頭の群れで移動しているイルカを観察することが出来た。その中に、漂流するごみをまるでオモチャのように扱いながら遊んでいたイルカの姿や、小さな子イルカを連れた母イルカの姿など、映像でしか見ることのなかった、イルカの生活しているさまに触れ、イルカの満ち満ちたエネルギーを目の当たりにした。陸に戻った後、うまく泳ぐことが出来なかった自らに悔しさを感じ、「またこの場所に訪れたい」と強く感じていた。

一年後、再び御蔵島を訪れた。この二年目の体験では島の雰囲気や状況、イルカウォッチン

グの手順を予測でき、余裕を持って野生イルカの姿を観察することができた。海での体の動かし方も一年前よりは楽に出来るようになり、イルカを見つけるたびにガイドの指示に従って海に入った。好奇心旺盛な子どものイルカが筆者の体に音波を当て、探りを入れる「エコロケーション」*を体感でき、そのなんとも言えない感覚や音に驚いた。また、好奇心旺盛な子どものイルカと並んで泳ぐこともできた。筆者はこの島に滞在している間、とにかく「楽しい」気持ちでいっぱいだった。また、水中で、目を閉じて海の波に揺られながらイルカの声に耳を澄ませると、何かに包まれているような、暖かい感覚を覚えた。この体験の間、とにかく「もっと海にいたい」「もっとイルカを見ていたい」という気持ちがあり、あっという間に時間が過ぎていた。しかし、この「もっともっと」と言う気持ちに我を忘れてしまい、海で泳ぐと言うことが予想以上にエネルギーを要することに気づけず、陸に上がったときには足が震え立ちあがるのに苦勞するほど疲弊していた。

この島での二度にわたる体験は、日常生活では絶対に得られないものであり、筆者への印象は強烈なものだった。今でも、目を閉じるとイルカの姿や声が蘇ってくる。イルカに直接触れることができずとも、イルカと泳ぐという体験は心の中に強く残り、「また行きたい」「もっと見ていたい」という感情を喚起させる。身体的な疲労は大きいですが、それとは別にまるで神秘的なエネルギーを手に入れたように感じられた。この一連の体験は、「イルカの癒しの効果」の一端に触れたかのようなであった。

しかしながら、野生イルカとの交流にはリスクも多い。野生イルカと交流できる場はわが国の中では数えるほどしかない。長時間の移動や多額の滞在費などが必要とされるため、体力的な面と、経済的な面の双方への負担が大きく、非常に限られた人しかその場に訪れることが出来ない。フィールドに出向いたのちも、海に出る体力や泳ぐ能力などが求められる。いざ海に出るときも、その日の天候、海のうねりなどに大きく左右されてしまう。実際、御蔵島は付近

を流れる黒潮の影響があり、島周辺の潮流は速く、天候も変化しやすく、降雨も少なくない。それゆえ、東京都内と島をつなぐフェリーは、栈橋に着岸できなかつたり、欠航したりすることもしばしばである。島にたどり着くためにも、島から出るためにも、時間的な余裕が必要になる。また、海という自然の場では負傷する危険もある。何よりも、そこに生息するイルカたちは野生であり、人がコントロールする訳ではない。イルカが眠っていたり、イルカが群れて海の深い場所で活動している場合には、イルカとの交流がまったく出来ない場合もある。AAT・AAAは、環境や動物たちのある程度のコントロールが必要とされるが、この場合、天候、海の状況、イルカの様子、AAT・AAAを受ける側の体調や泳ぎの技量、海への慣れなど、コントロールできない多くのものがある。これらのことから、治療の枠を設定できないということは、Smith (1996) の提案する野生イルカを介在動物とした「DAT」は、現実的には実施が困難かもしれない。

2. 飼育下のイルカ

人の飼育下にあるイルカとの交流はどうだろうか。筆者は現在、神戸市立須磨海浜水族園（兵庫県神戸市）で同園スタッフと共同研究を行っている。その体験を報告する。須磨海浜水族園は、野外のイルカプールでイルカとのふれあいのコーナーを常設している。イルカのプールの脇に専用通路を設け、そこから手を伸ばすと、イルカに触れることができる。イルカトレーナーの指示のもと、目の前を泳ぐイルカを見て近くに寄って、胸ビレに触れる感覚を味わうことができる。普段、眺める事しかできないイルカを間近で見、触れるという体験ができる。筆者がイルカに触れた際、それはゴムのような、ナスの表面のような、皮を剥いたゆで卵のような感触であり、いまでも心に残っている。間近で見たイルカの巨体や大きな口に驚いて大泣きしていた少女が、イルカと目を合わせてその体に触れると、ぱっと明るい表情になり、「楽しかった」と言う様子を見ると、イルカに触れる

体験が人にあたかな感情をよび起こすことが伺い知れる。野生イルカと比べると、ここでの体験は水中に入らないため、全身を包み込まれるような感覚には欠ける。しかし、このようにイルカに触れることが、水族園というより馴染みのある場で行える。このことは、比較的容易に、AAT・AAAを施行する可能性を示すものである。また、水族園という施設の中にあるため、海のうねりなどの自然の環境の変化に左右されにくい。さらに、イルカトレーナーによるイルカのコントロールが可能なので、事故などで負傷するリスクも少ない。筆者は、この水族園でイルカに触れる体験を通して野生イルカとの体験と同じように「もっとイルカを見たい」などの、再びこの体験をしたいという欲求を抱いた。実際、須磨海浜水族園の来園者は、イルカとのふれあいを体験をすると、筆者同様の想いを抱く人は少なくない。これは、Levinson (1969) のいう「いかなる動物も癒しの効果を持つ」ことを示すものであろう。

介在動物としてのイルカのこれから

我が国のイルカを用いたAAT・AAAは、JDATを中心として、自閉症をもつ子どもに対する短期集中型のアプローチが行われている。しかし、JDATでは、その活動範囲が地方に限られているので、参加できる人は限られてしまう。また、JDATでは野外での活動で、天候などに左右されてしまう。そして、短期集中プログラムであることから、得られた経過は一過性である可能性もある。また、筆者の知る限り、他大学での研究でも、短期集中型、あるいは一度きりでのプログラムや取り組みが多く、これらは継続性という点で気になるところである。

筆者らは、さらに須磨海浜水族園で、イルカのAAT・AAAに関して新しい取り組みを始めている。「須磨ドルフィンアシステッドアクティビティ(SDAA)」というこのプロジェクトは、神戸市近郊の発達障害や身体障害などをもつ子どもと、その保護者を対象にして、イルカを用いたAAAを行っている。本プロジェクトの大きな特徴は、一定のプログラムを考え定期

的に実施することである。JDATなどの国内のイルカのAAT・AAAプログラムは、短期間集中的にセッションを組むものである。この短期集中プログラムは、受ける側のコンディションや実施場所の状況、時間が限られるという制限があるため、プログラムの内容も変則的になりやすく、内容が統一し難い。SDAAでは、曜日・時間を設定し、プログラムの内容もある程度一定化し、よりコントロールされた環境で、実施している。その中で、感覚が過敏で生魚を触れなかった子どもが、生魚をつかみイルカにえさを与えることが出来るようになるなど、子どもの行動の変化や、「セッションがある日は子どもをゆったりとした気持ちで見ることができ、叱らずにむ」という保護者に余裕ができるなどの気持ちの変化を確認している。これらの新しい取り組みについて報告し、これからのイルカ介在療法を考えていきたい。

* 「エコロケーション」

自分が発した音波が何かによつて返ってきたものを受信し、それによってものの位置を知ること。そこから周囲のものの位置関係、それに対する自分の距離を知ることができる。音による感受法でありながら、一般の聴覚よりも、視覚に近い役割を担っている。

謝 辞

本稿の作成にあたり、多くの方々にご助力いただきましたことを、心より感謝申し上げます。

東海大学・創造科学技術研究機構・酒井 麻衣先生、東京都御蔵島村・御蔵島観光協会の皆様、神戸市立須磨海浜水族園イルカチームの皆様、心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

Akiyama, J. Ohta, M. (2006). Increased Number of Whistled of Bottlenose Dolphins, *Tursiops truncatus*, Arising from Interaction with People, *Japanese Society of Veterinary Science*, 165-170

Bertoti, D. B. (1991). Clinical suggestions : Effect of therapeutic horseback riding on extremity weight bearing in a child with hemiplegic cerebral palsy A case report as an example of clinical research. *Pediatric Physical Therapy* 3, 219-222

Breitenbach, E., Stumpf, Eva, F., Lorenzov, E, H. (2009). Dolphin-Assisted Therapy : Changes in Interaction

and Communication Between Children with Severe Disabilities and Their Caregivers, *Anthrozoös*, 22 (3), 277-289

Corson, S. A & Corson, E. O (1978). Pets as mediators of therapy. *Current Psychiatric Therapies*, 18, 195-205

Corson, S. A, Corson, E. O, Gwynne, P. H. & Eugene, A. L. (1977). Pet dogs as nonverbal communication links in hospital psychiatry. *Comprehensive Psychiatry*, 18, 61-72

Cynthia K. Chandler (2011). *Animal Assisted Therapy in Counseling*. Routledge New York

林 義弘 (1999). 検証アニマルセラピー 講談社 東京

石田雅人・漆原宏次・高岡 忍 (2008). 実地体験を通じた心理学教育の深化—イルカ介在活動への参加・観察から— 大阪教育大学紀要第IV部門, 57, 15-25

IAHAHIO公式ホームページ「About us」「Application process」「List of members」「Networking & meetings」<http://www.iahaio.org/new/index.php> 2014/12/20閲覧

岩本隆茂・福井 至 (2001). アニマル・セラピーの理論と実際 培風館 東京

J-HANBS 公式ホームページ「団体概要」「役員・顧問紹介」「J-HANBSってなんですか?」「加藤元先生のおはなし」「HANBの科学と実績」「インストラクター養成講座」<http://j-hanbs.or.jp/index.htm> 2014/12/20閲覧

加田陽子・石田雅人・高岡 忍 (2009). 自閉症児を対象としたイルカ介在活動の効果—香川県さぬき市での実践事例から— 大阪教育大学紀要第IV部門, 57, 39-52

門多真弥・森坂匡通・亀崎直樹・大矢 大 (2014). アニマルセラピーとしての“イルカ療法”—イルカとのふれあいを通じて— 京都女子大学発達教育学研究, 8, 55-60

門多真弥・亀崎直樹・大矢 大・他 (2013). 水族園来園者のパーソナリティとイルカイメージの検討—Dolphin Assisted Therapy (DAT)・Dolphin Assisted Activity (DAA) への健常者を対象にした基礎研究— 京都女子発達教育学研究, 7, 49-60

門多真弥・大矢 大・古池若葉・他 (2012). 「アニマルセラピー」における動物イメージについて 京都女子大学大学院こころの相談室心理臨床研究, 6, 35-45

門多真弥・岩本みゆき・永井里美・大矢 大 (2011). 熱帯魚の観賞がヒトの心理に及ぼす影響について ヒトと動物の関係学会誌, 28, 37

木谷秀勝・宮崎佳代子・石村真理子・西川麻里子・坪崎仁美・市野瀬かの子 (2005). 発達障害児へのイルカ介在療法の展望に関する一考察—JDATと下関市海響館での活動を中心に— 教育実践総合センター研究紀要, 19, 127-133

- 近藤尚也・安井友康 (2011). 重度身体障害者の乗馬療法における記述的記録を通じた評価の試み 北海道教育大学紀要, 教育科学編61 (2), 121-129
- Levinson B. M. (1962). The dog as a "co-therapist". *Mental Hygiene* 179, 46-59
- Levinson, B. M. (1969). *Pet-oriented child psychotherapy*. Charles C. Thomas, Publisher. Springfield (川原隆造ら訳 (2002). 子どものためのアニマルセラピー 日本評論社 東京)
- Levinson, B. M. (1978). Pets and Personality Development. *Psychological Reports* 42, 1031-1038
- Levinson, B. M. (1979). The Aquarium as a Therapeutic Aid. *Psychological Reports* 45, 577-578
- 前田高輔・高岡 忍・石田雅人 (2010). 自閉症児を対象としたイルカ介在活動の効果に関する事例研究 (最終報告) 大阪教育大学紀要第IV部門, 58, 15-33
- Melson, G. F. (2001). *Why the Wild Things Are : Animals in the Lives of Children*. Harvard University Press Boston (横山章光訳 (2007). 動物と子どもの関係学—発達心理から見た動物の意味— 星雲社 東京)
- 御蔵島観光協会 (2010). いるかいなか—御蔵島ミナミハンドウイルカ固体識別帳— 御蔵島観光協会
- 村山 司・森 恭一・中原史生 (2002). イルカ・クジラ学—イルカとクジラの謎に挑む 東海大学出版会 神奈川
- Nathanson, D. E. (1998). Long-term effectiveness of dolphin-assisted therapy for children with severe disabilities. *Anthrozoös*, 11, 22-32
- 小畑恵美子 (2009). イルカ介在療法の可能性を探る—文献的考察を中心に 山口大学教育実践総合センター研究紀要, 28, 115-124
- 小畑恵美子 (2010). 自閉症児へのイルカ介在療法の心理的効果に関する一考察 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要, 30, 121-128
- 尾形良子・今野洋子 (2008). 猫カフェ型AAEにおける来場者の自由記述の分析—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて— 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 1, 57-62
- Pavlidis, M. (2008). *Animal-assisted Interventions for Individuals with Autism*. Jessica Kingsley Publishers London (古莊純一・横山章光訳 (2011). 自閉症のある人へのアニマルセラピー 明石書店 東京)
- Pet Partners (旧デルタ協会) 公式ホームページ「About Us」「Therapy Animal Program」「History and Founders」<http://www.petpartners.org/history> 2014/12/20閲覧
- Reichert, E. (1994). Play and Animal-assisted therapy: A group-treatment model for sexually abused girls ages 9-13, *Family Therapy*, 21, 55-62
- 佐藤克文・森阪匡通 (2013). サボリ上手な動物たち—海の中から新発見! (岩波科学ライブラリー) 岩波書店 東京
- Smith, B. (1996). *Dolphin assisted Therapy* (青木薫訳イルカ・セラピー) 講談社 東京
- 高岡 忍・漆原宏次・石田雅人 (2008). イルカ介在活動の効果に関する考察—ある自閉症児の事例から— 大阪教育大学紀要第IV部門, 56, 29-42
- 太湯好子 小林春男 永瀬仁美 生長豊健 (2008). 認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 353-361
- 辻井正次 (2003). イルカ・セラピー入門—自閉症児のためのイルカ介在療法 プレーン出版 東京
- 若島弘文 (2007). 犬と家族の心理学—ドッグ・セラピー入門— 北樹出版 東京
- 渡辺 聡・前田瑞枝 (2003). イヌとの接触が気分およびイメージに与える影響について—好悪感情という観点からの検討— 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 219-223
- 横山章光 (1996). アニマルセラピーとは何か. NHKブックス 日本放送出版協会 東京
- 吉田恵美・亀山祐一 (2003). ウサギとモルモットを用いた訪問型動物介在活動—特別養護老人ホームとデイサービスにおける調査— ヒトと動物の関係学会 第9回学術大会抄録集

付 記

本研究は京都女子大学研究経費助成研究「ヒトとイルカの関わりと精神療法—新たなトラウマ治療への模索—」(研究者: 京都女子大学・大矢 大) に基づいてなされたものである。